



Vol.1

県社協いきいき長寿課では、いきいきと年齢を感じさせない生き方をし、「元気に活躍している高齢者および高齢者団体を「元気高齢者発信事業」として広く県民の方々に広報する取り組みを行っています。

保土原頓尻芸能会

伊達市保原町

活動内容

演芸（七福神舞）による慰問活動・各種祝賀イベント等への出演



▲衣装や大道具（馬）はすべて手作りです。

活動25周年を迎えた町の人気者集団

保土原頓尻芸能会は、伊達市保原町の旧三日市地区の芸好きが集まり、町の文化祭や新年会、同級会、福祉施設でのアトラクションなどで賑やかな踊りや演芸を披露する人気者集団です。活動を手गतさせたのは平成元年で、当時祭りやカラオケが好きで集まっていた仲間が歌だけでは物足りず、踊りも取り入れてみたところ、すぐにその楽しさの虜となったことがきつ

かけでした。今年で結成25周年を迎えましたが、メンバーは結成当時からほとんど変わらず、会の事務局局長および座長として活躍する水口長人さん（72歳）をはじめ、伝統芸能の経験があり演技指導を担当する副会長の齋藤富義さん（75歳）、元消防団長で団体のまとめ役としての経験が豊富な相談役の石井福男さん（79歳）など多彩な顔ぶれです。また、全メンバー13名のうち半数以上が女性であることも特徴です。

「頓尻」と「七福神舞」

会のユニークな名前は、かつて旧保原町が「保土原」と呼ばれていたこと、ひょうきん者の意味をもつ地元言葉「とんけつ」に漢字を当てはめて「頓尻」と表記させたことから名付けられました。披露する芸は、メンバーが七福神に扮し手作りの衣装と大道具を用いてユニークな振り付けで踊るといふもの。一人ひとりが独自の振り付けを持っており、楽しく踊り歩くステージはいつも大盛況です。この七福神に扮した踊りのルーツは、昭和30年頃まで大師講の際に若者たちが踊り明かして楽

しんでいたという祭事にあります。古くからこの地区に受け継がれてきた若者の祭事を、地区独自の伝承舞として確立できるよう七福神の踊りとしてアレンジし、現在まで披露している「三日市七福神舞」が誕生しました。この踊りは郡山市の高柴デコ屋敷や本宮市（白沢）などを訪れ、水口さんが考えたもので、真似たと言われないようオリジナルなものにこだわり演技力を常に磨いているといいます。また、干支に因んだ動物の大道具も、実物を観察するところから始めるという立派なものです。※旧暦11月23日（新暦12月30日）の晩に行われる民間行事。家々で小豆粥・団子などを食べる。

多数の出演依頼 いつでも元気に披露

保土原頓尻

芸能会は活動を開始して以来、平成13年のうつくしま未来博など県内各地の様々なイベントやアトラクションに出演しているほか、結婚式や新築祝い・新年会など地域の様々な行事や祭事でも縁起の良い七福神舞を披露しており、現在も月に2回程度の出演依頼があります。ひとたび

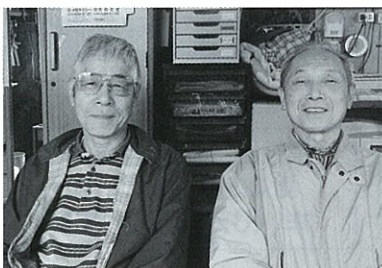


▲保土原頓尻芸能会メンバー（うつくしま未来博出演時）

イベントが開催されれば会場は常に満員となり、他に類を見ないオリジナルの踊りや演芸に会場は笑いと言葉に包まれるそうです。メンバーの平均年齢は70歳を超えます（うち75歳以上が8名）が、その元気は変わることなく、出演依頼があればいつでも喜んで引き受けています。この日お話を伺った際も既に数件の依頼をいただいているというので、会の活動が地域にしっかりと浸透していると感じました。

やれるじぶんまでやろう

活動の原動力を何と、「やはり面白いことが好きな者同士との長年の仲間と一緒に続けていること」との答え。メンバーそれぞれの個性を生かして演じることが悦びにもなっているといいます。息の合った仲間であらう積極的に活動が続いている保土原頓尻芸能会ですが、一番若いメンバーでも72歳ということで、高齢となってきたメンバーがいつまで頑張れるかが今後の課題なのだとか。それでも、これまで通り元気に「やれるところまでやろう」という思いで続けたいと水口さん。後継者を育てて長年受け継がれてきた町の伝統を後の世代につないでいくという目標を掲げています。



▲座長および事務局長の水口さん（左）と副会長の齋藤さん。